

新しい響振の時代へ

一心幹を鍛えよう

QLT 小林 裕

現代社会は地球環境を守るため循環型社会形成を求めている。一方、現代社会は大気、水、土壌、太陽の光など、多様な生命を維持するために不可欠で有限な資源にフリーライドする経済偏向社会ではないかと感じる。私にはこの2つの社会の将来像が矛盾に満ちたまま示されているように思える。短期成果主義の下で発展したアメリカ型経済社会の結果として地球環境に急激な変化が起こっていて、経済偏向社会がまもなく終焉を迎えるだろうと体感する。終焉は突然襲ってくるかもしれないが、突如的に終焉を迎える前に、漸進的に無用な争いを避けながら新しい社会に移行していかなければならないと思う。

ここで、新しい社会とはどのような社会なのか考えよう。私は新共存社会と名付けたい。他人、他社、他団体あるいは他国との共存というような既存の概念を超えた新しい共存を模索しなければならない時期を迎えている。自然との共存という概念を加え、経済価値のほか環境価値、生命価値、生態価値などを大切にできる地球規模の全体共存社会を想像する。人が生かされている地球環境を破壊してしまっただのような共存の議論も始まらない。新共存社会への移行ができなければ地球は殆どの生物が住めない無機質な星となってしまうであろう。新たな生命の誕生までの時間と地球が冷えきるまでの時間のどちらが先なのか私には見当がつかないが、人類が生まれた軌跡をもう一度たどることはないのであろうと思う。

それでは、新共存社会に向かうための、新しいリーダー象について考える。伝統的なリーダーが目的を示し共感者を目的に向かわせるのに対し、新しいリーダーは自らがひとりから目的に向かうという姿が想像できる。経済価値に偏向せず、自修自得・流汗悟道の境地を知るリーダーの背中を見ている人が正しいリーダーシップを受け継いでいく。人は世のため人のために役立つ生き方を求められて生き生かされている。全ての人にとってこの場この時が自分の生きる時空間だと思えるような集団では、全ての人がリーダーシップを発揮できる。心と心が共鳴する響振の時代といえるのではないかと思う。

ところで、仏教の世界では、「自力」が、意識して自分が努力するのに対して、「他力」は、もうこれ以上努力出来ないというところから発現するのだそうだ。つまり、他力は自力を尽くしたところに発現するといえる。自力と他力が相互連鎖するような社会を想像してみる

と、誰もがリーダーであり、同時にフォロアーであるような新共存社会が見えてくる。フォロアーがいなければ前進できないようなリーダーはすでにリーダーの資格がない。新しいリーダーは一人で行動できる人であろうと思う。そして、自分のためではなく人のために行動できる人ではないかと思う。小集団的で多様な志に裏付けされたリーダーシップが人の数だけ存在するような社会を想像できれば、それが響振の時代の始まりとなる。

このような新しいリーダーは、「心幹」を鍛えることが大切である。心の幹は見えないだけに鍛え方と結果が分かり難い。時間軸を長く取ることが必要だ。しっかりした心幹を持ったリーダーが新しい時代に求められているのではないかと思う。